

眞生

第三卷 八月號

◆理想こそ實在ではないか。然に或る人々は「理想は實在でない理想は單なる願ひに過ぎない、單なる願ひは現實でない、現實でないものは空想である、空想は即ち實在でない。實在でないものは夫れが如何に高く尊く見ゆるとも、夫れは吾々の求むる所のものではない、吾々の求むる所のものは現實に於ける最も高き實在である」と。

◆乍然靜に思へ眞に理想こそ吾等の求むる實在そのものではないか。否少くとも現實に於てあきたらぬ所に、我等の理想があり、その理想の所にまで、此現實をして往かしむるところに初めて眞人の求むる實在があるではないか。

◆理想なきところに努力なく、努力なき所に理想はない、理想は人生の中の實在であり望みであり、喜びであり、力である。人生のすべてを統一し、指導する所の生命活動の中心は即ち吾人の理想そのものではないか。理想なき所に何の望みがあらう、望みなき所に何の進歩があらう。進歩は實在への過程である。

◆人生を通じて、永遠の生命に生き、無限の向上に自らを立てしむるは、そこに理想實現の世界があるからではないか。理想は實理を尊び、空想を嫌ふ空想と理想とは雲泥の遠いである、空想は實在でない、乍然理想こそ即ち眞の實在ではないか。

◆理想は現實にあきたらぬ所より起る、而て其にあきたらぬ所に眞の實在を求むるではないか、されば現實を離れた理想はなく理想を離れた實在はない、理想こそ眞の實在ではないか。(念)

信仰の中心問題

目次

◆信仰の中心問題	尅	子
◆至誠心に就て反省	土屋	觀道
◆白道への轉向	川村	二郎
◆知らざる疑ふもの	寛	子
◆悔懺録	演	阿彌
◆吾朋便り		

▽心頭を滅却すれば火も亦涼し、なごつたわいもない事を云てゐる悟り屋がある、そんな奴にこそ水をコップなりに喫はしてやりたい、其塵生くら禪を聞かされると暑くて仕様がなない。

▽暑いのを暑く思ふなど云はれるほど暑い話はない、暑さに痺痺れ暑さに無感覺になれど云はれるほど暑い事はないそれが正しい信仰なら猶禪である。

▽暑い時には暑いのが當然だ、だから其れ位は暑さの入口だと味到するとき、苦熱の中に苦熱に促はれぬ一抹の涼味がある。

▽物には事に味らうとして怖れぬといふ盲目蛇式と、真相を十分知つたから恐れぬと云ふ正見道とがある。恐れぬと云ふ點は同じのやうだが、一つは根本的滅却道である、他は徹底的實相把持である、一つは根本的滅却道である。

▽釋尊は知らずして造つた罪よりも知てなした罪の方が輕いと云て居られる、そして道理真相に味といふ事が既に一大罪惡だと喝破してゐられる、實に徹底的合理主義者である。正信といふのも實にかくあべきである、眞に似而非信仰者を排らう萬劫の涼味である。

△暑い時にも暑くは無いと、さもしい繼兒根性を出して氣嫌氣褻をとらうとするやうでは佛の心もわからぬ。滅却道は愚か却て自分自身を冒瀆する無人格者である。(尅)

△信仰問題での一番暗がりは何と云ても「佛」である。

△或は「神」とか「實我」とか、言葉は様々に呼ばれてゐるが自己全體を統一する衷心點：それが判きりせぬから仕うも總ての事が曖昧に見えていかぬ、譬へば救濟論でも佛土論でも總てが神話のやうに或は寢言のやうに思はれてならぬ、若し佛とか神とか云ふ宗教上の本体が判きり解るならば信する氣にもなるだらうし、又其救ひも疑へなくなるだらう、だから早く其佛とか云ふ本体を突止めたいと誰れしも希てゐる。

△勿論本尊の確立といふことは信仰の初門であると共に最奥の問題である、同じ佛といつても其内容程度には數限りなく、信する者の深さに應同してゐる譯である、而しいくら程度の低い佛であるにしろ、之れが信の体験となりて居らねば入信でもなければ宗教を持てゐるのでも無い。

△それでは其佛といふ本尊は何處にゐられるか。

△「佛」と聞くと縁遠く感ずるから先づ「私」といふ者に就て考へて見よう。私の「私」とするものは何處に居るか、腦髓を「私」といふ可きであらうか、腦髓も「私」の腦髓であつて「私」そのものではない、手か足か軀全体か、それらも皆私の手、私の足、私の軀と名付けられるものであつて「私」そのものではない、即ち目に見える「私」以外に尚ほ「私」とせらるべき部分がある。此目に見える「私」と目に見えぬ「私」とを宗教では「佛」と「神」と人と説いてゐる時、總ての場合に私をして生かして居り私を意識せしめてゐる根本存在を追究する時、即ち無限の深さと無限の廣さを有する絶大我、眞實我を全體とし味はずには居れなくなる無量壽(深)無量光(廣)の佛とは此眞己の相に名付けたものである。

△此如來様に生かされて居り本來の自己眞實相に徹した自分として自ら見出し得たとき何者にも碎かれぬといふ不滅の自覺に甦る、その時が往生であり見佛であり見性である、そして其必然的不滅の進展が宗教人としての念佛行眞實生活となりて現れずには措かぬ。(尅子)

至誠心に就ての反省

(三)

土屋觀道

二

以上私は至誠心に就て主として信者の誤まつてゐると思はれた方面に渡つて其の反省を促して來たが更らに私は積極的に至誠心そのものゝ内容に就て更に一段の觀察を下して見たいと思ふものである。

尤も茲に言ふ所の至誠心とは念佛信者の必ず具せねばならぬ所の三心の中の至誠心に就てゐるが、一口に至誠心を以て眞實の心である、偽りなきまことの心であるといへば已にそれだけでも其の意味は判つたやうであるけれども、然ば偽りなき心とは如何なる心であるか、偽りなき心といふも單に心理學的に偽らないといふことゝ眞に人生としての偽らない生活とは如何なるものがそれであらうかと人生生活の眞偽の立場から之を見るのとは自からそこに幾分の違のあることを認めずにはゐられない。徒つて眞實の心といふことも眞に如何なる心が眞實の心であらうか、眞實にあらざる無價値の生活から出た心は決して眞實の心とはいへぬ點から見ても、念佛の行者が必ず具せねばならぬ眞實心としての至誠心が如何なる眞實の心であらねばならぬかは大いに考へさせらるものがある。譬ば人と争いたい心の起つた時にそれを偽らず争ふといふことは其の人にどつて少くとも偽らない心であらう。乍然それが眞實の生活であらうか其の他人の物を盗みたいやうな悪心が起つたときそれをそのままに實行することはすしも其の人に於て其の自分をありのまゝに働かしたことであり、従つて偽らないやり方であるかも知れぬ、又物を失ふて之をさがし求むるが如き、或は人と人との間に立つて自分の所信をよしあしに關はら

ず述ぶるが如き之を心理學的に云ふならばそれはそのままが偽なき行爲であり、又偽りなき心であらう乍然かゝる行爲が果して自己及社會に對して眞に有利であるかどうかは更らに考ふべきことである。従つてかゝる行爲が道德的に眞實の行爲とし又偽りなき生活として見らるべきかは更らに一考を要する問題である。而て念佛信者に於ける至誠心が眞の意味の偽らぬ心として如何にあるべきかは更に一考を要することであらねばならぬ。

尤も稱ふる念佛が名刹の爲めでなく、全く往生淨土の爲めであるといふ意味に於て偽りなく本氣であり眞劍であるといふことはそれがまごゝろの現はれであり、眞實心であるといふことに於てもとより私にも異存のあらうはずはない。けれどもそれが只心理的にたゞ一心に專念であるといふ意味の精神統一の形容の感のみでは今少しくもの足りないものがある。それは何であるかと云へば至誠心そのものゝ價値の内容に就てである。彼の古人の所謂「至誠以て天に通ず」と云ふ至誠の如き或は明治天皇の「目には更に價値的至誠そのもののあることを知ることができらう。従て善導が至誠心を以て眞實の心であるとなし、而も其の眞實の心を以て自利眞實、利他眞實として表示された眞實心は實に千古の金言であつて崇敬措く能はざる所である。

一体私は此至誠心に就ては永い間よく考へさせられたものであるが、そもそも此の至誠心なる言葉は何れが先きで何れが根本であるであらうか、此のことは深く考れば偽りの生活といふやうな偽りと偽りを云つたといふやうな偽りとは特に區別して見ねばならぬものがある。而て至誠心と云ふことが眞實心

三

であり、而も其の眞實心が自利眞實利他眞實といふことになつて來れば其の偽りといふことが單なる偽りを云はぬと云ふこと丈けに止まらずやがて一切の生活に於て自己を偽らず又人を偽らぬと云ふ意味にまで進まねばならぬものである。從て自己を害し他を害するやうな言行者は心意が眞實でないこと云ふことは明かである。然らば自己及び他を偽らない即ち眞に自他共に眞實であるべき心とは何であらうか。此の心こそ實に念佛者の必ず具せねばならない至誠心であるではないか。然に世人果して此の心ありや否や。これぞ誠に私共の心に反省すべき至誠心である。而て此の自他共に眞實なるべき心とは何であらうか。私はそれは各自の具有する自己本心の根本的要求そのものであるとする、何となれば凡そ世に此の自己の本心ほど眞に眞劍に、而も自らを偽らず一切を愛し、一切を攝して眞に向上しやうとするものがないからである。而て此の心たるや實に一切の萬有の個々の上にも内在せるところ深くその心源を研むれば等しく、宇宙の本源より來れるものとして其の源を此の宇宙の生命に發しないものはない。從て此の心たるや宇宙の本質を内在し、此の本質に歸一融合せざれば止まない所の心の性質であつて、やがては此の宇宙の本質と同じ働きのの上に立たねば止まない無限の生命と向上との欲求の上にあるものである。從て此の心たるや實に常に絶對の信念の上より一切を愛し、一切と共に立たねば止まない性質のものであつて、之を佛教では佛心若くは佛性と云ふのである。されば吾人が一度も眞劍に自己そのものを反省すれば如何なる人と雖も此の自性に目醒めないものとはなく、又如何に自分が自暴自棄の淵に陥つた時と雖も一度自らの人生を考ふる時忽にして此の本心のさゝやきに會はないものはないのである。

然は本心の要求とは何であらうか、それこそ宇宙の本心に融合せんとする吾人の根本要求であつて所謂不死の要求と無限向上の要求である。而て此の心たるや皆應分に一切の萬有の上に内在するところの

ものであつて、私の信する所によれば一切の萬物は主として此の方面への發動が即ち萬物の進化發展である。靜に觀すれば如何に宇宙の宏大にして無邊なることよ、而て是等は宇宙の大道によつて活動す。而して一見我等に矛盾と見える事柄も靜に考ふれば此の要求の理想實現に外ならないものである。穢土を厭い淨土を欣求するといふことも要求するに此の向上の現はれである。たまたま自らの生命を斷ち或は向上の一路を否定して、我が生命の向上に相反するが如きの行爲に出づる人々も、よくよく其の内心の要求に耳傾ければ其の實反て、自己本心の永生の望みと無限向上の欲求の結果であることに氣付くであらう。斯くして宇宙一切のものとして眞に其の生命を愛し眞に其の生をして意義あらしめやうとせぬものとははない。而て此の要求の最も自覺的に現はれたものが即ち道を求むる眞人の姿である。而て各自に於ける自利眞實利他眞實の要求は所謂此の自己本心の宇宙の本源に歸らうとするの要求であつて之こそ即ち吾人の偽らぬ心であり、又眞實の心であるといはねばならぬ。從て至誠心とは即ち此の眞實生命の要求心である。誰人か眞に死を好み不死を好まぬ人があらうぞ又誰人が眞に向上を嫌い自暴自棄を欲するものがあらうぞ。私共は實に永遠の生命と上なき人格の向上を要求する。いはばよくない死にたくないの欲求である。而て此の要求たるや即ち一切萬物の上にある。斯て社會は進展し萬物は相関し宇宙の生命は萬物の上に漲り天地の大道は萬法の上に輝く。單なる一個の生命も靜に望むれば萬法と一体であり、天地と共に一如である而も其の生命が宇宙の生命と融合する所そこに眞實の宗教があり念佛がある。又そこに永遠の生命と無限の向上とが充實し人生の慰安も、望も、力も、此の信仰中から出づる念佛の上にある。

白道への轉向 (一)

川村二郎

私が上人様に、始めてお目にかゝりましてから丁度、今年で四年めであります。其間いろいろ、御指導に預りました。私の信念の上にも、非常な進歩をなしましたことを自覚するのであります。一度私に、告白をせよ〜とお仰せになりましたけれどもいつも、いつも其機会を逸して、つい其意を得ませんでした。此頃私の平素の所感を、筆の動くがまゝに、認めて見ましたから、御一覽を願ひます。

大正十年一月、淨安寺様がみへまして、今度、光明會といふ、少し智識階級の人々で、信仰を中心とする會を組織したいと存じますから、あなたも、會員になつて下さいとのお話でありました。私も大變結構な、催しだと存じましたので、早速承諾をしておきました。而して講師は土屋觀道師で、大變信仰の深い熱心な見佛論者で、淨土宗の

三名物ともいはれてゐる方だといふ事を、承つてゐましたので、二月の第一回の御講演から、多大の希望を以て拜聴いたしました。ところが私の平素懐いてゐます信念と、大分相違してゐる様に感じましたので、これは大變だ、こん大問題を、このまゝ、黙過する事は、お互のためにならぬ、これは一つ上人様にお尋ねねばならぬと存じ、失禮をも省みず御部屋に參伺して、色々御説を承つた次第でありました。

その私の信仰上の相違點と申しますのは第一上人様のお願ひになる念佛は、どうも自力の念佛が混つてゐる様に感ぜられます。第二、上人様のお念佛は、滅罪の爲の様なもので、また臨終正念を祈られる様に感ぜられたのであります。

それで私は、上人様に對し、少々過激でありましたかは存じませんが、大分反對論を稱へましたところが上人様はニコ〜微笑されまして諄々と私を御化導下さいました。

今左に其質問の一端を記憶に存してゐますから

大略述べて見たいと存じます。

川「上人様のお話を承りますと、どうもあなた御念佛は、自力の計らひが混つてゐる様に感ぜられますが如何ですか。

上「決して自力等の念佛ではありません。川「そうですか。どうも私には、自分で努力してゐられる様に感ぜられます。恰も船に乗つて尙ソラ行けソラ行けと力瘤を入れて、ゐられる様に思はれます。私は念佛は、如來様の救済に目覺めて始めて中心から、慶びの念佛として、自然に溢れ出るのが眞實の念佛かと存じます。要するに私は念佛は感謝の念佛でなければならぬと存じます。

上「あなたの様な、感謝の念佛も決して間違つてはゐませぬ、けれどもまだ其れでは足りないです。ね、吾々の中心の要求は、無限の向上であり、す、如來の如くなりたいたい、親の如く成長したい、と言ふのでありますからいつまでも〜子供で御恩有り難い御恩有り難い等と言つて満足してゐられぬのであります。

川「足りないとお仰せになりますけれども私は決して足りないとは思ひません、私はそれ以上の要求は最早不必要だと存じます、何故なれば親の偉大な力に抱かれてゐましたなれば、決して心配をするには及びません。力弱い腕でだきついでゐなくとも親がしつかりと捉まへてゐて下さつたれば決して落ちる氣遣はないのです。今絶對無限の如來の御慈悲の中に抱かれてゐます事に自覺されましたなれば、それで充分であります。其他の事は強て如來の御胸中にある事ですから如來にお任せいたして措けばそれでよいのです。吾々は唯それを感謝する意味に於てお念佛してゐればそれでよいのです。

上「それなれば小兒が乳を呑むのは自力ですか他力ですか。

川「自力です。

上「小兒が乳を吸ふのは自分の口で吸ふのだが親から授けられた乳房より乳を呑む、その呑むだ乳の爲に成長するそれも自力ですか、それと同じく

與へられた名によつて念佛するその念佛によりて漸次靈化される、それもまた自力の念佛でせうか私の稱へる念佛には少しも自力の計らひは混つてゐないつもりです。信仰は恰も小兒が乳の爲に成長するが如く漸次靈化向上せなければなりませんいつまでもいつまでも御恩有り難いと満足してのみゐられませうか。物は停滞すると腐敗する處が有ります、今あなたの信仰も丁度停滞してゐるところではありませんか。

問答の要點はザット斯様な順序でありました、然し遺憾ながらまだ私には充分上人様の御説に同意する事が出来ませんでした、而してその信仰の向上とか如來の如くになりたいとか言ふ様な事がそも／＼自力の計らひではないか、吾々は信の一念が有れば充分だ如來の如くに成り得る事は必然の約束だそれが爲に苦不生者不取正覺と誓ひたまふたのではないか、そんな餘計な希望は不必要だ等と當時内心に反感を懷いてゐましたのです。

斯の如く上人様の信仰と私の信仰とは相違して

ふこそ、またいそぎ浄土へまいりたきころのさふらはわはいかにさきふらふべきことにてさふらふやらんぞ、まうしいれてさふらひとかげ、親鸞も、この不審ありつるに、唯圓もおなじ心にてありけり、よくよく案じみれば、天におざり、地におぢまほごに、よろこぶべきこそか、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定さおもひたまふべきなり、よろこぶべきころをおさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり、しかるに佛かれてとるめて、煩惱具足の凡夫さおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくの如きわれらがためなりけりさしられていよいよたのしくおぼゆるなり、一下略（歎異鈔）

鴻大な如來の御慈悲は喜ばねばならぬ、然しながら歡喜の志が湧き出ぬのは煩惱具足の凡夫だから仕方がないと云ふ風に解決してゐたのです。

尙一つの私の不満な點は、如來様は我が親だと常口になしてゐましたけれど、然しそれが眞實の親だと言ふ事がまだはつきりしてゐなかつたのです、即ち極樂へ行くと言ふ事が眞實親のこところへ還るのではなくして如來様のところへ貰はれて行く様な氣がしてならなかつたのです、其處に私は淋しさを感じてゐたのです。

（續く）

ゐたのであります、上人様は伸びんとせられる、私は停滞せんとする、上人様は積極的である、私は消極的である、其處に大なる停りが有つたのであります。然しながらこの大なる停りが、いつのまにか、接近して來まして遂に上人様の靈を通して如來の大精神に直接觸れる事が出来ましたのです、今その私の信念の進展して行く有様を述べて見たいと存じますが、その前に當り少しく私の信仰の内容を披瀝しておく必要があります、大略は前述の如くであります、其處にまた私には一種の不満と淋しさがあつたのであります、即ち念佛を稱へてゐましても頓ど中心から悦びの心が湧いてこないのです、何んだか頭の上から何物かで壓迫されてゐる様な感じがしてならぬのです、これが不愉快で／＼でならなかつたのです。然しまたこれには慰安の道が開れてゐたのです、即ち歎異鈔の第九節の唯圓房に對する親鸞聖人の御返答であります。

「念佛まうさふらへごも、踊躍歡喜の心、おろそかにさふら

知らざるものは疑ふものなり

寛子

「知らざるものは疑ふものなり」此の言は我師法然上人によつて教へられたるものである。世の人は自分の眼に映つただけにそのものを見る、四角なるべきものを三角に八角を圓と見違へるのはまだしも進行すべきものを退却して見ることさへする理屈はどうにかつくだらうが眞實はかくあつてはならぬ、常に進動せなければならぬ、向上より他に汝の道はないはずだ、退脚することが悪いのだから單なる靜止は悪いにきまつてゐる、模倣はよいけれども單なる模倣は死だ、登るための階段はいけれども單なる模倣は死だ、登るための階段はいる教へる人はあるけれども行くのは唯一人自己でないか、水の邊につれられた馬が驚いて水をのまぬのを笑ふものがあるればそれは自己を笑ふものではないだらうか、小さい窓からは小さい世界だけしか見られぬ、若し人を批評するなれば批評する自己の修養に心かくべきだと自分ば信する、佛

教が一切唯心造と教へるが社會現象一切は自己の現はれでないだらうか、内に病魔のあるを知らんとせば社會の外魔を見よ、見にくき有様に舞踏することよ、釋尊の成道の前は即ち内魔外魔の闘争であつた、東天の明星によりて覺醒したといふ、友よ驚け汝は光に進むべき運命にある地獄には斷じて行くことを得ざれ。無量光の太陽は汝の前にあるまばゆいだらう。眼を閉ちて内省せよ。無量光と汝の眞心と通ふ一點のあることを發見するならむ自己の進むべきものを進ませないで此れこそ眞實宗乘なり我が祖師の言行なり教導なりとするそこに已に矛盾があるでないか。傳記位で祖師の人格を知り諸宗に對抗し闘争議論の勝を得んとして作りあげられた宗乘を以てこれこそ大乘佛教なりと勝手な理屈をつけて得々としてゐる賣宗家があるかと思へば、社會を惡化する僧侶の中にはある、体面を作らうとして追しようをするやつもある、なさない宗教の價値を下劣にしたのは他に何にも原因はない宗教の假面をかぶつて表だけの生活

をやるやつが皆自分のふところを考へてばかりゐるからで、實に五濁の世だ、濁りに濁つてゐるこの泥田から眞生の白蓮を咲かせなくてどうしよう顔をそむける惡臭の中からは五月蠅い蚊や蠅だ衛生に悪い早く退治せなくては。小さい箱に入つた娘には虫がわく、きたない心からは惡魔が出る、外魔の實狀を見せつけらるゝ吾人は早く内省して知らざるものは疑ふものなりの惡聲を早く除くべきだ。疑心暗鬼の驚きをしないように擔板漢の人間になりたくない、自己は常に宇宙の中心如來の大悲に向つて突進してゐる。かけ聲もろともに走つてゐるのだ、不完全といはれよう、馬鹿といはれようけれども他からの批評は教へのためだ。賢を見ては等しからん思ひ不賢を見ては自ら内に省みる。單なる感情や理屈で退却する意氣地なしで已はに自己を殺すものだ、友よ進ふではないか、眞實淨土へ生命を屠して群賊を退りぞけて進まふぢやあないか。

懺悔錄

(廿三)

演阿彌

細廉にして全一なる如來様よ。折角待つに待つた五日間の寺の御別時も肝心の御聖人様の思はざる御病氣の爲に愚な私の張りつめた氣は半ば以上弛んで本當にガツカリして仕舞ました。是畢竟私の利己主義が禍ひする處であります。毎日診に来て頂きますと醫師に御尋ねしますと「チブスにならねばよいがとの疑がないでもありません。然し夫は萬々の警戒であり用心でもあります。今少し経過を見ないと本當の事は判り兼ねますが」と仰つてでしたが、かゝる方面に無智であつた私は御涅槃に入らるゝ程の重大事を暗示して居る御病症だとは知る事が出来ませんでした。半分は御看護半分は御念佛と云ふ變態的な御別時。夫でも私の心の中では熱心に熱心にと云ふ思ひは忘れる暇もありません。御聖人様があの御念佛は誰れだとき々御尋ねになつたとやう承りましたが、事實私

には唯だ祈りの眞劍ざ以外には何の望みもありません。然し一面に此御別時も駄目だと云ふ愁しい心と思ひすてた心との二つも働かないでもありませんでした。兎に角私達は淋しく物足りなく然かも悲痛な祈りの心で御念佛して居りました。此の五日間の終の日が來ました。結衆一同は靜に病室に入つて御聖人様最後の御説法を聽聞致しました本當に涙なしに聞いて居る人としては一人もありませんでした。満堂嘔り泣きの聲に肅然たる神聖さと云ひ知れぬ淋しさを感せずには居られませんでした。私は此日法類の訃報に接したので御看護の序を以て一寸申上げました處、夫れは御聖人様も御知合の事でもありませんので「こちらはよいから其處に行つてさう云ふ際に信仰の種を蒔いて置くがよい」として私の上京を御許し下さいました。離れともなき心を無理に○氏とT氏と三人で夕方の雪模様の中を出發致しました。心は跡に残つて本當に後髪を引かるゝ淋しさは實に何とも云へない残り惜しさで御座います。思へば之が永遠の御

別れであつたのです。何と云ふ淡い別離であつた
でせう而してまあ何と云ふ不思議な御縁であつた
のでせう噫々御聖人様よ。常磐の花咲く御國より
見をなはせ！。私は今も力強く御聖人の御教と御
心とに依つて活かされて居ります。我本來の面目
に照見し我大ミオヤの絶大なる御姿に思入つて私
のなす可き道も了々として明かにされて居ります
唯だ願は夫に對する私の力丈です今の私には何の
力もありません。否な私自身に何の力がありません
う。私の無力弱少さは幾度かどれ丈深刻に明かに
されて居ります事ですやら。けれども如來様は屹
度屹度私に其力を與へて下さいます。どうぞ御聖
人様もあの大きな御力の一分を私の上にも注いで
下さいませ私は大なる確信を以て斷言致します。
私が私利私慾に陥らず眞實に如來様の御旨の一部
分を顯はしたいと祈つて居ります限如來様の御力
は強く強く私の上に現る可き者だと云ふ事を。然
様です乞食見た様に御ねだりしなくとも如來様は
迦度屹度私の上に大なる力を注いで下さいます。

得ませんでした何と云ふ肺甲斐なさで御座いませ
う二三日の後歸省しましたが偕考へれば考へる程
慨歎に堪へません。此旅行の當初の決心はどんな
であつたのでせう。最初の意氣込は何處であつた
でせう思へば本當に耻かしう御座います。よくも
のめめと歸へられたものです。よくも厚顔に本
尊様に遇はれた者です。肺拔者！鐵面皮！。然か
もエネルギー勞費の結果は段々懈怠の心さへ起き
て來るではありませんか。是れ凡夫性の然らしむ
る處と片付けて仕舞ふ譯には行きません。此様な
やくざな心は是非其退治して仕舞はねばなりませ
ん。かくて翌十二月にはまた御すゝめの許に百山
の御別時に出掛けました。如何してもとの眞剣な
願からであつたのでしたが、是も御聖人様の重病や
續いて御他界の爲に五日間有耶無耶に過して仕舞
ました。二日目頃であつたかと思ひます。同文電報
は諸々に「御聖人危篤」の報を傳へましたので直様
飛んで行き度かつたのですけれども。上人が是非
自分が行かねばならぬから百山結衆の爲に残つて

否な現に注いで下さつてゐる事を明かに御示めし
になつて居ります。私は私の全分を如來様の爲め
に費消し盡さなくては本當に心から喜ぶ事は出來
ないので御座いますもの。御聖人様どうぞ御安心
下さいませ。私達は固き決心を以て御聖人様の御
意志の如く如來様の聖旨の萬分一を現はすべく努
力して居りますから。嗚呼。然し思へば不可思議
の御因縁で御座いましたね。こんな事を思ひ乍ら
も私達は白皚々たる深雪の中を而も身は箱の中に
温められ乍ら行くのでした。變り行く美しき雪景
色外は嘸ぞ寒い事です。此峻烈な寒氣に御上人
様は如何あらせられます事やら。長野と過ぎ高崎
と行く。最早雪も見えぬ勝であります。やがて翌
早朝上野につきました。暗かつか越路に引替流石
に東京は殊に鮮かな花やかさを見ました。然し今
の私達には夫には何の感興も起きませんでした。
私は御すゝめのまゝに○氏の御宅で朝飯の御供養
を受けてから法類の寺を訪問致しました。説かね
ばならぬ私の使命。然し其力の弱さを歎かざるを

呉れどの御懇請もだし難くさわぐ胸押し沈めて鬼
に角も居残りましたが五日目の夕急遽四五の道友
と共に上町へ十六七間時を飛んで行きました。宛
かもよし御聖人様御密葬當日の事として人々の出入
も多く遠國の方々も澤山に見えてざわついて居り
ました。這入ると直感的に一種妙な神聖にして森
嚴なる可き日に相應わしからぬ變手古な空氣を感
じました。何か事があつたなど直ぐ推察されまし
たが其慶事は私達に關係した事で有りませんから
病室に入つて靈柩の前に額きましたしたが直に傍に居
られた上人の隣に座してニッコリ會釋を交しつゝ
共に御念佛を致しました。一時間斗りして後舊
知の皆様へ御挨拶しましたが別段他意もない御様
子更に私達あとから來た者の爲に靈柩を開いて最
後の御別をさせて頂きましたが宛かも生けるが如
き麗しき御尊顔に一同胸ふさがる思ひ堪へ難く袖
を濡らしました。噫。今暫く五六年も御化盆下さい
ましたならばなご誰の胸にも浮びました事でした
然し夫れも今は詮無き事要は唯だ残された私達が

眞劍になつて其御遺業を相續すべきであると思ひます。さるにても今日の暗き日よ。午后一同は本堂に入つて出棺の讀經がありやがて雲霧降る路を北邸の茶毘所へと長蛇の列を作つて進みました。三々五々寄つては離れ離れては寄りして。噫淋しい悲しい日でありました。雪の交る雨の寒さはまた格別で婦人連の二三は尻古垂れたらう御座いました。晩になると分骨の事で何だかゴタゴタがありました。變な事を物々し相に争ふ人達。私には夫がごつちに如何ならうとよし夫が全部當麻山にやつて仕舞つたとて問題ではないと思はしました。夫よりモット重大な事が残されてあります。夫は私達自らがモットモット眞劍になつて作佛度生の祈りを深めて行かねばならぬ事です。私達はモット單純にならねばなりませんモット純眞にならねばなりません。無論如來様に育まれては行く様なものの矢張教へ導く聖者の力にまたねばならぬ物が澤山あらふと存じます。然るに今聖者に先立たれ愈々責任の重きが加へられんとして偕て如何

に今后を處置す可きか皆んな打解けて話合つて見る必要がないでせうか。來年の祖山の別時會を待つ迄もありません今此處で何故あとから來た私達にも御遺言の全部を明らかに打ちあけて呉れなかつたでせうか。端武者等は取るに足らぬと仰しやるならまた何をか云はんやです。然し分骨問題も一時は醜態を示めたが兎に角平和に解決が着いて御遺骨は翌日莊嚴なる式の下に三分されました。而も禮拜儀は讀まれず佛身觀であつたかと思ひます。私は二三人の人達と同車で直に歸途につきました。何だか面白からぬ零圍氣から外に抜け出した様な氣分で。無論是等の中に濁のある譯もありますまい。而して宗我的偏見もありますまいが何となく不調和の色の見わたのは如何した事なのでしようか。三昧とは調和であり直調であり等持である云ふ。然し念佛中のみが調和であり直調であつて他の平常時がさうでないならば一種の遊戯に過ぎません。然かも夫れは明かに矛盾であり虚偽であります。御念佛が直調であり等持であるな

らば日常の行動も順逆共に調和のつた信仰心がさやうにさせたので眞生誌上に表はれる御上人様始め姿を示さねばならぬと存じます。あつたらうと思はれてならないの皆々様の御熱誠なる御説も有難く私達が念佛三昧を旨とする限り畢であります。更に斯く導き給はつ拜見いたしてをります。此度は又竟平素の生活が人生最高徳なる絶た御上人様方の御苦勞に謹んで感御當寺(唐澤)に於て三昧會が催されてあらねばなりませんから日常私達は仕合せ者です其後亦々元の空厄介になつて居りました時より黒の中ですべてを調和しすべてに調阿彌で御佛の御慈悲を忘れやうと岡様や其他の皆様と共に憧れて居和されて行く處に亦た人生の平安してゐる時縁にふれ事に當り大悲りました御當寺であります不幸なる喜びもあるべきではないでせうか。(續く)

□吾朋便り

□大阪岩崎親雄様より
……然悦んで下さい、それは私は子供が死にました時悲しみの裡に無限の喜びを感じましたことで御座います。あの莊嚴な子供の死の刹那眞に御佛の御慈悲の深さと廣さに泣いて喜ぶことが出來たのは私が知らず識らずの間に培はれ來

頂くのも凡てが御親の靈示と識つてどうして感謝なしに居られませう。何とか彼とかいひ乍ら。しながらトウ／＼佛さまの絶大の御力に引摺られて往くこの私は仕合者だどツク／＼感じさせて頂くのであります。

□廣島縣 中野治榮様より

□釜山にて 藤井實應様より
唐澤の御別時に御同行の方にて共に御精進遊ばさるゝこととほるか釜山より隨喜いたして居ります行基寺に歸つて師匠と種々信仰談を交へました師匠の信仰増上を大に喜び私自身大に勵むべきを決心いたしました今回都合悪く御別時

に参加させていたゞくことの出来 反つて叛逆の友とさへなるものが寸毫も忘ることはできませんでし
ないのを残念に存じます、二十二 ありますのにかくも心許せる道友 た。中にも重態の床に伏し給ふ大
日にこちらに参り豫定の如く九月の上なき集を得たことは私にとつ 阪の大寶寺上人と四日市の中野新
初旬迄充分努力してゆき度いと存 しては寧ろ涙ぐましい感じでした。 兵衛氏と我九州の立川けさちよ氏
じます。

唐澤三味會便り。

觀道

澤の靈地に於て斯くばかり多くの いものの一でした。念佛は單なる
毎歳の事ではあるが今年こそと今 道友が凡ての俗事を打捨てて念佛 特權階級者の爲めの安價な氣休で
度も唐澤に登りました。預てから 道場に来るの喜びはそれこそ何にもなく又悪人正機としての良心魔
三四の道友とも人数の多少にかゝ 譬へんすべもありません。くだら 痺の薬でもない、正に一切人類の
わらず心から念佛しやうと誓つて ない幻影を遂ふやうな友もなく、 眞人として立つべき第一の念佛で
ゐたのでした。従て殆ど一人とし 何れも人格中心の如來の慈光に浴 あるのです。然ば私が涙を流して
て別時會の参加も促さない覺悟で される道友の精進さはほんどうに 全人類の眞實の自覺を促すと云ふ
さへあつたのです。然に今年ほど 近來見たことのない喜びでした。 ことは此の三味會に於ける道とし
謂知れぬ喜びと望みと力とを感じ 乍然かゝる場合にも私の心には て矛盾した行爲ではありますまい
た事はありませんでした。之も偏 不幸にして此の道場に来る事ので 斯くて初めての友も多かつたの
に如來の大悲とはいへ道友の心か きなかつた道友の方々とそれに此 に比して殆ど予期以上の好果の中
らなる求道心の然しむる所であり の炎熱燒くが如き中に少しの休課 に七日の別時を終つたことは私に
ませう。私には永年の宿望が漸くも 得ることのできない多くの人々 とつては近來に無い満足でした。
其の緒について來た様な感じが い や或は不幸にして未だ眞人の意義 山を下る道友の意氣果して如何。
たします。世には何うした因縁か をも知らない人々の多くある事を 恐らくは必ず應分の靈化を受けて

限りなき慈光の中に喜びにむせぶに一夜を明して三十日早朝山に登 全

人のみであつたことと存じます。 つて親く上人の遺跡を偲びました 全 神谷たね
全集は七月の二十一日の夕方 永年願つた私の心には上人の面影 名古屋西區崇徳寺 淺野孝眼

會散は二十八日の正午でした。 然が一層強く限りなき慈光の中に浮 全 新道町 畑田はつ
に此の中の過半は皆居残つて法光 び出ることを禁じ得ませんでした 全 隅田町廿一 渡邊つね子

寺の光明會に列しました集まるも 之も予期せぬ恩寵の一つです。 思 全 東區千種町 渡邊ちか子

の二百人ばかり之も亦喜びの一つ へばなづかりかりし唐澤の別時よ 全 愛知縣海部郡佐屋村 黒宮平八

でした。 山主を始め山田飯田小口 又永劫に續けかしと願はずには 全 全 黒宮ゑい

宮坂の方々並に多くの町の道友が られませんか。 全 全 天津島町の場 中野善英

色々御飯の御世話までしていた 唐澤山會集名簿左の如し 全 全 藤井鶴次郎

だいた事は上なき感謝の一でした 唐澤山阿彌陀寺山王 宮澤説演 全 全 津島町 大崎喜助

私まで入れて二十二名の道友は此 清水市清水港實相寺 中村辨康 全 全 津島町鍵清内 松本壽延

の夜法光寺に御世話になつて翌朝 横濱市海岸通町五二〇内海 健郎 大阪市東區貞松院 豊田省三

身延の日蓮上人の舊跡を訪ねるこ 全 全 内海しつえ 全 全 南屋町 松井戒順

とになりました。 一同一隻の船に 全 全 山崎作藏 尼ヶ崎市大物圓平寺 樽本藤子

乗せられて彼の有名なる富士川を 大垣市郎町五五 桑原省三 大阪市南區天王寺大通樽本ヒサ

降つたのでした。 それこそ予期せ 静岡市住吉町二四 藤井貞邦 全 大阪府西成郡天下茶 高田シマ

ぬ如來の恩寵でした。 限りない自 東市本郷區切坂町三〇小倉彦六 大府西成郡天下茶 高田シマ

全北長狹通二ノ十一 鶴田たき全

全山本通四ノ百三 森田好淋 此の外上諏訪の町の人々にして毎

全山本通四丁目八ノ四 森村よね 日四五名多きは十四五名に及ぶこ

新潟縣柏崎大須 宮川くらとあり。

全柏崎枇杷島村 原 富

寄贈並誌代拂込芳名

松浦卯之助 寄贈の部

松浦千代 ○金貳拾圓岐阜行共寺様 ○金五圓

石井庄太郎 水谷仁三郎様 ○金貳拾圓黒宮平八

石井トキ 様 ○金拾圓浦賀信者某様 ○金五

吉田そめ 圓樽本ヒサ様 ○金五圓之上池上春

伊藤いく 五郎様都築七太郎 一七九

永島さき 誌料の部

長澤嘉一郎 ○金拾圓福岡縣柳河武田哲哉様 ○

山田竹子 金拾貳圓浦賀光明會員上坂伊之助

飯田せい 様扱内譯 ○金貳圓長島文吉様 ○壹

宮坂きよ 圓石井庄太郎様、黒岡仁太郎様、

小口ちう 藤井専三様、中野久藏様、服部梅

小口わき 吉様、角井クニ様、山下ヒロ様、

松永兼吉 伊藤いく様、赤穂孝藏様、上坂伊

松永龜治 之助様 ○金參圓桑名光徳寺様、鬼

久我尾正治 頭藤十郎様 ○金貳圓三吹六兵衛様

中川弘道様、石波勇様、愛知縣濫

川性源寺様 ○壹圓貳拾錢上田貞雄

様、猪狩教子様 ○壹圓坂三次郎様

橋本政一様、二階堂八年様、前田

えい様、福田吉祥寺様、長畑須賀

男様松竜寺様、名達隆次様、櫻井

とよ様、三橋博様、大塚久様、小

保方ひで子様、國峯かく様、吉村

えい様、長澤みね様、井上ゲン様

小澤うた様、小林きみ様、大塚は

る様、小崎より様、小林りう様、

甘田様、松浦卯之助様、藤村よね

子様、金丸曾一様、山田觀月様

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

振替口座東京四七二八番 眞一生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼土屋觀道

發行所眞生社

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所三井清次

東京市芝區三田四國町三番地三號

印刷所玄々堂印刷所

大正十一年三月五日